2024年3月3日 久宝教会 受難節第3主日礼拝メッセージ

「真実を語る時」　　牛田匡牧師

聖書　ヨハネによる福音書 6章 47−60、66−69節

「ヨハネによる福音書」は、イエス様のセリフ、独り語りが延々と長く書かれている所が多くありますが、今回の箇所もそうでした。イエス様が自分に付き従って来ている大勢の人たちと話している場面ですが、読み進めているうちに何が話の中心だったのかが、段々分からなくなって来てしまいます。そのために、今回は分かりやすく省略、抜粋して、読んでみました。

ここで述べられているテーマは、永遠の命に至る「命のパン」についてです。どうしてこのような話になっているかというと、この「ヨハネによる福音書」6 章の最初に書かれていたのが、3 週間前の礼拝で読んだ「5000 人の共食」のお話しだったからでした（6：1−15）。5000 人もの大勢の人を前にして、「食べ物が全然足りません」と困る弟子たちをよそに、自分の持てる 5 つのパンと 2 匹の魚を差し出してくれた子どものように、互いに持てる物を分かち合ったら、十二分に分かち合うことが出来た、満ち足りてなお余りあった、というお話しでした。

その後、多くの人々がイエス様の後について来たわけですが、イエス様はそれらの人々の思いを的確に見抜いておられて、6 章 26 節では「あなた方が私を捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満足したからだ」と言われています。つまり、大勢の人がイエス様について来ていたのは、「今日のパンのために付いて来ている」に他ならないと分かっていたわけです。そして 48 節以降は「朽ちないパン」、食べても食べても無くならない「命のパン」についての話となっています。古代イスラエルの人々は、古代エジプトでの奴隷生活から脱出した際、40 年間荒れ野を旅している間、毎日天から「マナ」と呼ばれる食べ物が与えられて、人々は飢えることなく食いつなぐことが出来たという民族としての伝承、記憶を語り継いで来ていました。

しかし、そのマナを食べた先祖たちは皆、既に眠りに就いているのに対して、本当の「命のパン」を食べるならば永遠に生きる、と言われています。そんなことを言われたら、誰でも「じゃあ、そのパンを下さい」と言いたくなるでしょうが、イエス様が続けて言われたのは、51 節「私が与えるパンは、私の肉である」ということでした。意味が分かりません。それを聞いていた人々も、52 節にあるように「どうしてこの人は自分の肉を我々に与えて食べさせることが出来るのか」と言って議論し合ったとあります。一体、どういうことなのでしょうか。」

毎月、私たちが行っている釜ヶ崎でのおにぎり配り、炊き出しやお弁当配りの様子を考えてみると分かりやすいと思います。私たちの教会では毎月 1 回、礼拝後に皆でおにぎりを作り、西成警察署の裏手にあるいこい食堂まで届けに行っています。すると予め食堂の前には、「14 時からおにぎりを配ります。整理券は 13 時半から配付します」という看板が出されていていますので、13 時半から順番に食堂に来られた方々に、整理券をお渡しして行きます。そして 14 時になったら食堂の前の公園で、整理券の番号順におにぎりをお渡しして行くという流れになっています。その場に来られる方々は、今食べるためのおにぎりを得るために、集まって来られ、列に並ばれています。その方々を前にして、「食べても食べても無くならない命のパンがあります」と言ったら、当然「それをください」と言われると思いますが、それに対して「それはイエス・キリストの肉と血です」と答えたとしたら、「あほらし。そんな食われんもんは要らんわ」と言われるのがオチです。

確かに、釜ヶ崎には様々な団体が支援に入られて、炊き出しやお弁当配りなどをされています。中には、「礼拝後に炊き出しをしますので、最後まで参加して下さい」という伝道熱心な教会もあり、1 時間以上の長い時間をかけて、公園で集まって来た人たちと一緒に賛美歌を歌い、聖書を読み、メッセージを語った後で「それでは、ご飯です」と炊き出しを配り始める教会もあります。さらには洗礼を受けると、更なる特典やお土産がつくのかどうか分かりませんが、お弁当をもらうために何回も洗礼を受けたという人もおられるそうです。そのような伝道を行っている教会の言い分は、「単に一時の空腹を満たすお弁当や炊き出しをするだけではなく、人々の魂の渇きを癒やす、永遠の命に至る神の言葉を伝道しています」ということなのでしょうが、何だか炊き出しの列に並んでおられる受け手の側の方たちとの間に、大きなズレがあるように思えてなりません。「イエス・キリストを信じて、洗礼を受け、その肉と血を食べる、つまり聖餐式の儀式に参加することで、あなたは永遠の命が得られ、死後に天国行きが約束されます」という教会側の論理と、「あほらし。よく分からんし、『アーメン』でも『ラーメン』でも何でもいいけど、とにかく早く食べるものをください」と言われる方々との思いの違い……。その両者の間にあるズレに目をつぶったまま、上から目線で炊き出しやお弁当配りをすることには、違和感を覚えずにはいられません。

同様に、2000 年前にイエス様の周りに集まって来た多くの人々も、確かにその日のパンを求めた人々でした。そしてイエス様も、そのような人々の思いを知った上で、その日のパンを求めることそれ自体を非難はしませんでした。むしろイエス様が厳しく批判したのは、イエス様自身を奇跡を起こすスーパーマンとして、様々な理屈をつけて、特別扱いしようとする「弟子」と称する人たちや、人々に上から目

線で教えを垂れようとする指導者的な人たちだったのではなかったかと思います。「人の子の肉を食べ、その血を飲むとは、一体何のことを言っているのか」「そんなひどい話、聞いてられない」。そう言って、多くの「弟子たち」が離れ去り、イエス様と共に歩まなくなったと 67 節には書かれてあります。そこにこそ今回のお話の中心があるのではないでしょうか。

何千人、何百人という人々が、自分に付き従い、自分の言うことを聞いてくれるような状況にある時、人は自分が承認されていると感じたり、また何か周りの人たちよりも一段偉くなったかのように感じたりするのではないかと思います。しかし、本当にそうでしょうか。「金の切れ目が縁の切れ目」という言葉ではありませんが、何か不都合が起こると、途端に集まっていた人々は散り散りに離れ去ってしまう、そんな儚いものなのではないかと思います。そして、その上でも尚その場に残っている関係性こそが、本当の意味での人と人とのつながりと言えるのではないでしょうか。

イエス様がこのお話の中で何度も言われている「私の肉、私の血」とは、もちろん聖餐式の儀式のことを急にここで表しているわけではありません。そうではなくて、単純に「生きたイエス様の生身の姿そのもの」のことを表しているのであり、食べ物を食べることを通して自身の身体が作られるように、「イエス様の生き様そのもの」を自分自身の生き様として、自らの内に取り込んで、その心と体と一つになって生きるということを表していると考えられます。そして、それは時に仲間との衝突や分裂に突き当たり、対立や困難も避けられないかもしれません。そのような受難の道であったとしても、それこそが誤魔化しのない真実の道、長い物に巻かれて、波風を立てない一時の平穏に甘んじるのではなく、本当の意味での心の底からの平安、解放、自由へと至る道なのではないかと思います。分裂や対立を恐れて、理屈をこね、言い訳に言い訳を重ねている限り、それは朽ちるパンを食べているだけです。イエス様の姿、その血肉を自分の血肉とする時、そこには真剣勝負ゆえの痛みも苦しみもありますが、だからこその自由や解放、絶対の命（永遠の命）もあるのではないでしょうか。

３ 月に入り、確定申告の最中ということもあって、自民党の「裏金」問題をめぐって、自民党の支持率も内閣支持率も史上最低という所まで落ち込み続けています。格差が拡がり続ける中で、インボイス制度の強引な導入などで、中小零細事業者は絞りに絞られ、カラカラに乾ききった中から更に搾り取られている中、大半が世襲議員の上級国民たちは、賢く法律の網目をかいくぐり「合法」的に、所得を隠し、脱税を長年にわたって続けて来ていた。そのことへの人々の怒りが爆発しています。人々から信頼され、選挙で選ばれたはずの、賢いはずの人々が、どうし

てそのような不正を働き、また不正を不正と認めずに「法律に則って正しく対処した」などと開き直り、居直っていられるのか。恐らく、ここに至るまでに理屈に理屈を重ね、言い訳に言い訳を重ね続けてきた結果、もはや何が真実で、何が正しいかが、分からなくなってしまっているからではないかと思います。真実を語ってしまうと、これまでに築いてきた権力も、富も、人脈も、全てが崩れ去って行ってしまう。だから、決して真実は語ることが出来ない……。それは、とても不自由なことですし、また恐らく「幸せ」でもないのではないかと思います。ナチス・ドイツのユダヤ人大虐殺という恐ろしい暴力が何故起こったのか。それを支えていたのは悪魔的な絶対悪ではなく、その背骨となっていたのは自分で判断をすることを放棄し、ただ命令に従っていただけの平凡な人々の「凡庸な悪／悪の凡庸さ」（ハンナ・アーレント）だったという言葉も思い出されます。

昨年のジャニー喜多川による性暴力問題や、宝塚歌劇団のパワハラ・いじめ問題に続き、年末から松本人志の長年にわたる性暴力問題が、報じられています。海外の映画やテレビ業界でもそうですが、圧倒的な権力差の下で「仕事を続けたかったら、言うことを聞け。このことを誰にも話すな」と言って、相手を搾取し、その人権を踏みにじる恐ろしい犯罪が、各地で行われて来ていました。そしてそのことによって、人生を破壊された方々も少なくありません。アメリカなどでは「me too 運動」として、被害者の方々が「私も被害者です」と勇気を出して告発に名乗りを上げて来ていましたが、日本ではまだ「被害を受けた方にも理由がある」というような差別が根強くあり、なかなか「me too 運動」が広がって来ていませんでした。しかし、ジャニーズ問題や宝塚問題などで、勇気をもって実名告発して来た方々に励まされ、背中を押されて、これまで長年口をつぐんで来た、自分で自分の中に抑え込んで来ていた被害の体験を訴え出て来られる方々が、少しずつ増えて来ているように感じています。真実を語る力は、真実の言葉からしか生まれて来ないのでしょう。

今、私たちの暮らしているこの社会の中では、日々、真実の言葉がどれだけ語られているでしょうか。「これを食べればすぐに満足できます」というような謳い文句の食べ物があふれていますが、そのような中で本当に私たちの血肉を作る食べ物、イエス・キリストの生き様を自身の生き様にすることは、何と難しいことでしょうか。真実を語る時、多くの友が去っていきます。積み上げて来たものが崩されて失われて行きます。それでもなお、自らの使命のために受難の道を歩まれたイエス・キリストが、確かに今もおられます。そこにこそ本当の自由、本当の命が残されるということを信じて、私たちもまた勇気をもって真実を語る歩みへと導かれて行きます。